

教育不在の県教育界

日田市の養護学校の教師たちが、学級の知恵遅れの子のしぐさをまねして忘年会で興じたという。何と惨酷なことを！しかし、真相を知れば知るほど、それは障がい者への深く広い差別思想に基づくもので、県下教育関係者全体が根底から問われているといえよう。

本紙「声」でも異例なほど痛切な反響が寄せられている。だのに、県教育委員会はこの問題に関する直接的な対応を県民の前に、今に至るも示していない。恐るべき無神経と怠慢である。障がい児への蔑視が教育行政の底流にあるからだ。つまり、よい教師を養護教育に配置することに本気でない。親の悲痛な訴えが聞こえていない。

私の経験―某養護学校に講演に行ったおり校長に教室を見せてもらったが、授業時間中、ある女教師はお化粧の最中だった。校長「恥ずかしいが養護学校の現実です」と。養護教育は普通児教育よりずっと難しい。教育管理職になる条件に養護経験四年を加えるべきだろう。

さて、日田の事件は即興でなく、何日間もくり返し練習されていた。「やめろ」と制する教師がいはいははずはない。校長にもそのことが耳に入っていたのでは。この学校は文部省指定研究校だったし、文部大臣表彰の教師も残っている。まあ、賞といえはショーにすぎず、とくに役所のするのはあやしいものではあるが。全く救いのないこの教育現場！。

つぎに、内部的なものが表に出て事件化するの、内部から出されるのが普通だ。そういう時えてして、暴露された己が悪を反省せず、だれがバラしたかと内部犯人探しにヤツキとなる。悪はさらに悪を重ねる。ただ教育退廃へと極まっていくな道筋である。

最後に、「子供を守る」「教育を守る」と私たちに言い続ける教員組合は、どう考える行動しようとしているか。その答えが聞きたい。

人類の教師ソクラテスは「教育とは子らと自分の魂の面倒を本気で見続けることだ」と。

(一九九〇年三月二十日)